

ART ESSAY

アート★エッセイ

日常空間を作品で彩る

長谷川 朋広
(ゲームグラフィックデザイナー)



いま、私が暮らしている家にはいろいろな作品が飾ってある。自分の作品もあれば、買って来た作品、また鉱物の結晶や貝殻など自然が生み出した作品も多い。動物の骨、クジラのひげなんでものものもある。それらの作品が、玄関から部屋の中まで、ズラリと飾ってある。当の本人からしてみれば、なかなかの自慢の品であったりするのだけれど「なんで部屋の中でそんなことを？」と尋ねられ、肩を落とすことも少なくない。モンスターの立体造形や骨が多いので、人によっては「なんでそんな不気味なものを？」の意もあるようだ。

私の仕事はTVゲームの制作で、ゲームに登場するモンスターをデザインしている。昔から不思議なもの、珍しいものが好きだったので、ただ自分が好きなものをつくったり、買ったりしていたのだ。あるとき、つくった作品たちが箱に入れられ、押し入れの奥に詰め込まれているのが可哀想に思え、何気なく見るところに並べてみた。すると、何やら良

い感じではないか。まだ仕舞ったままの、あれもこれも飾りたくなってしまった。そうなるとうるせに並べられるガラスケースも欠かせない。ケースを買ってくると、また飾るスペースができる。今度はどんなものを並べようか？ あれ、なんだか窮屈、それではケースをもう一つ…。気がつけば、たくさんの作品に囲まれた部屋になっていた。そうなるとうるせに、さらに愛情がわいてくる。どうせ飾るならいちばん綺麗に見えるようにしてやりたい。照明をあて、もはや恋人か我が子にまで地位が昇格した作品たちのため、あーでもない、こーでもないレイアウトを変えてみる。これがまた楽しい。普通に生活している中で何らかの作品が目に入り、その作品の世界へ思いを馳せる。この間ほんの数秒にしか過ぎないのだが、それでもただの日常から解放される。なんだか新しい作品のイメージがわいてきたぞ、またガラスケースを買いに行かないと。

(はせがわ ともひろ)

FINAL FANTASY X に登場する
モンスター「レモラ」のデザイン画
と立体模型



© SQUARE ENIX CO., LTD.
All Rights Reserved.



特集

先生が変わる! 授業が変わる!

第 1 回

私の成功と失敗

授業はドラマだ、失敗を恐れるな

人との出会いが教育のすべてと覚えることがある。いい先生との出会い、思い出に残る言葉、すばらしい授業の光景。こまごまとした知識は消えているのだが、人の進路を決定してしまうようなすばらしい出会いがある。

教師も子どもも一回限りの人生を歩んでいる。さらに時代という大きなベルトに乗ってともに移動しているのである。この二者は授業という場面ではじめて交点を持つ。

教師1年目は教科書、指導内容、授業の立ち上げ、言葉かけ……すべてが初めての連続である。若さゆえの苦い失敗がある。しかし、いわゆる技術的な未熟さは児童・生徒の包容力?によって見事にカバーされることが多い。熱心さ、ひたむきな思いは通じるものなのである。問題なのはちょっとなれたころにやってくるスランプである。

「子どもはいつの時代も同じ」だといわれる。教師も時としてそのように感じてしまう。しかし突如として、昨年と同じことの繰り返しがまったく効かないということが起こる。崩壊の前兆である。ベテラン教師もこの罠に陥る。

長い教師生活の中では歯車が狂うことがある。子どもを見失うような恐怖心を感じることもある。しかし何回もこの危機を乗り越える。その都度脱皮する。

教師も日々成長し、がんばる姿を背中で見たい。

日々新しい子どもと新しい自分が火花を散らすという状況の方がよい。

造形活動に関わる授業ではどのような題材をどのように提示するかが、授業そのものの成否を分ける。成功と失敗はこの一瞬に凝縮される。

授業の立ち上げは毎回スリリングなドラマだ。失敗を恐れるな。

子どもの思い？ 私の思い？

～「思い」違いがもたらす迷宮～

千葉県印旛郡栄町立安食小学校 佐久間 三智子

1. はじめに

私の失敗談…それは、私の授業で、「私の代わりに筆を手にして、私の思いのままに表現している子どもたちがいたのではないか。私は、その姿に自己満足していたのではないか。」ということである。失敗談というより、懺悔に近いのだろうか。

平成に入ってから学習指導要領の改訂により、図工教育の学習指導の質的転換が求められた時、「子どもの思い」と「私の思い」の狭間で、そのバランスや組み合わせ方に悩まされたものである。

改訂以前に取り組んでいた授業を「私(指導者)の思い \geq 子どもの思い」、改訂後に取り組んでいる授業を「私(指導者)の思い \leq 子どもの思い」として、あえて、2つの式で対比しながら私の懺悔したい思いを語らせていただきたい。

2. 私(指導者)の思い \geq 子どもの思い

私の過去の実践の中に「素描・クロッキー指導」がある。一本線でゆっくりと描かせたり、輪郭線のみ追求させたり、様々な指導方法で取り組んできた。

また、混色の指導も「三原色でたくさん色をつくる」ことや「黒や白の混ぜる量を変えて、マス目に塗らせる」ことなど、訓練的に取り組ませたこともある。わりばしと墨汁で、そのかすれなどの線の効果を生かした絵画指導も。

これらは、形をしっかりとらえ、実物に近い色を使った、いわゆる誰が見ても「じょうずな絵」、大人から見て「味わいのある絵」をより多くの子どもに描かせたいとする「私(指導者)の思い」から出発し、その思いを子どもたちに納得させ、「子どもの思い」にすり替えていたのではないのだろうか。

でき上がった作品の色も形も、子どもたちが描

く前から、「教師の思い」により想定されていた。つまり、私(指導者)の思い $>$ 子どもの思い、ということになる。

その完成図に向けて、教師の熱意と指導テクニックで感動させ、子どもたちはその作品づくりを「自分の思い」として、熱心に誠実に取り組んでいた。(と、信じていた。いや、信じた)。

だから、私(指導者)の思い $=$ 子どもの思いという式も成立する。

これらを合わせて、私(指導者)の思い \geq 子どもの思い。

独り言：子どものためと信じていたが…。本当は、いったい誰のために、取り組ませていたのだろうか…。

3. 子どもの思い？ 私の思い？

あえて、「構想画の作品を創作する(6年生)」という同一の教育活動で、私自身の改訂以前の実践(\geq)と改訂後の実践(\leq)を比較してみたい。

実践1：改訂前

私(指導者)の思い \geq 子どもの思い

絵画表現として、ある一定の質が期待できる、いわゆる「絵になる」題材を提案する。例えば「銀河鉄道之夜」や「きつねの窓」。目指す表現が明確で、でき上がりの作品イメージがほぼ共通である。

「きつねの窓」を例にとると、題材の提案時には、「お話をもとに、桔梗の咲く中を走る白いきつねの様子を自分なりに表現しよう」と、構想を練らせ、話し合う。そして、指導者は必要な表現方法を習得させるため、様々な技法を指導する。

この場合、「私(指導者)の思い」=「私(指導者)の想定する表現(作品)」に向けての指導である。子どもたちはいくつかの登山路は選べるが、具体的に目指す頂上(作品)に向け、収束していくというイメージであろうか。教師は、事前に下見をし

た登山路に応じて、登り方を教え導く。子どもは自分で道を選ぶ時や登る時に個性や創造性を発揮する。その結果、ある一定レベルの同質の作品が数多く生まれる。

実践2：改訂後

私(指導者)の思い \leq 子どもの思い

児童の発達の特徴を考慮した内容を取り上げ、追求するテーマは明確であるが、でき上がりの作品イメージはいろいろである。

実践例「わたしのイメージする友情」

提案——言葉では表現できない友情のイメージを絵に表現すると……

ここでは、自分自身にとって『友情』とはなにか、本当の『友情』とはどんなものか…など、じっくり考えさせ、言葉で端的に表現できない複雑な思いも、絵でなら表現できるのではないかと、また、絵でしか表現できない友情のイメージを追求してみないかと提案した。

教師の提案をきっかけに、子どもたちは、既成の概念にとらわれないで発想し、新しい試みなどを含めて表現の主題やテーマを見つける。1つの思いを深める、いろいろな思いを描くなど、児童はいろいろであるため、それぞれの思いの広がりを妨げない共感的な見守りと児童の構想に応じた支援を心がける。一人ひとりの目指すイメージに合わせて、指導者は個に合わせた資料を提示したり、技法を紹介する。

この場合、児童は、個性、創造性、情操といった「子どもの思い」から、登山路を切り開いてい



「友情
一月の下で
語り合う」

く。それぞれの道を探索し、それぞれがそれぞれの具体的な頂上(作品)に向かう。拡散していくイメージであろうか。教師は子どもとともに登山路を切り開いていく。一人ひとりの子どもがどこへ向かおうとしているのかを常に探りながら、旅立ちの手助けをする。その結果、思い思いの異質な表現の作品が生まれた。

独り言：実践1(\geq)は、私が子どもを振り回していたが、実践2(\leq)は、子どもが私を振り回していたような…

4. (\geq)と(\leq)に潜む 図工教育の迷宮

実践1(\geq)と 実践2(\leq)は、本来目指す頂上が違うのだが、あえて同一の教育活動で、その意味するところを比較してみたのである。

実践2(\leq)は、まさに個性、創造性、感性といった理念的な部分の育みを第一に目指している。こういう理念的な部分の育みは、計算力のようには図れないし、表すことができない。

実践2(\leq)を通して私の感じた「子どもの思い」は、理論では説明しがたい。理論を突き詰めていくと、「美術の教育」と「美術による教育」という古くからある美術教育の2つの概念の狭間で迷宮に入り込んでしまう。

私は、子どもと直接かかわる現場の教師として、理念的な部分の育みが計画的に教育活動の中で確保されることの重要性を仲間の先生方に実感してもらいたいと願い、今、「実技研修」を広めようとしている。

教科書にある「絵の具遊び」や「ローラー遊び」などを、作品づくりのためではなく、表現そのものを体験してもらおうのである。美術が苦手な教師も含め、ほとんどが「うまい、へたにこだわらないですんだので、気持ちよかった」、「心が自由になった」、「夢中になっていた」、「おもわず、試行錯誤していた」と話していた。

体験をした教師は、完成した作品にとらわれず、活動そのものにある「心の作用」「心の動き」に気づいたのである。それは、個々の「創造性」「感性」を目覚まし、育んでいることにはないだろうか。まさに、教師たちは図工科でねらう「生きる力」=「つくりだす喜び」を実感したのではないだろうか。(さくま みちこ)

失敗の連続

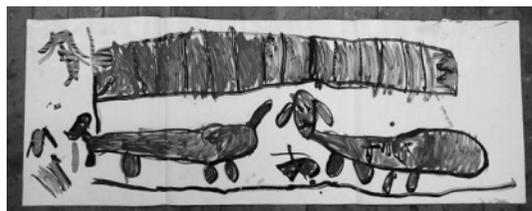
東京都新宿区立四谷第四小学校 鈴石 弘之

1年生と出会う4月。子どもたちが初めて担任に付き添われて図工室にやってくる。図工室の工作机と四角の固い椅子は1年生向きにはできていない。背の低い子は、二の腕が届かず、山脈のような机に向かっている。肩から下は全く見えない。

図工の時間は「お絵かきや工作をする時間ですよ。」と担任の先生に言われているだろうから、初々しく期待感と少々の緊張感で私を注視している。ごま塩の髪だから、図工の先生は随分年寄りだなあと直感しているはずだ。それが証拠に、ちょっと知恵のありそうな子が、「先生いくつ？」と帰り際に聞いてくる。毎年の恒例だ。この頃は、諦めて本当の年齢を言うことにしている。もうすぐ還暦だ。

最初の2時間続きの授業は、図工室にある備品や道具、そして画材などを一つひとつ紹介し、最後に危険なバンドソーには決して近づかないようにと注意する。それも丁寧に実演入りで。1辺が10cm以上もある角材を切ってみせるのだ。キーンと唸りを上げて角材を切り刻む音は絶対の効果がある。

最初の題材は「お花畑」。折紙を用意し、イメージした花をハサミで切り取り、貼り絵にしてもらうシンプルなものだ。すると、丸が切れないと言って嘆く子どもが2~3人。そして、べたべたと糊を折紙に付けて、画用紙が糊のかたまりで小山になっている子どもが4~5人は確実に存在する。中指で糊をつけ、親指と人差し指で折紙をつま



「長く長く」

で貼り付ける技はだれも知らない。みんな集めて、丸く切る方法や糊付けの技を伝授する。



好きなものを描こうー「図工の先生」

それから、子どもたちはまた製作を始める。それがものの5分と続いたのだろうか。お花畑と主題を提示したのに、2つの花を貼り付けて「できた!」と、糊でべたべたの作品を持ってくる。「何か虫でもないかな?お花畑に。」などと、イメージの増幅を願って、再度の製作を促すと、花と同じ色のチョウチョらしき昆虫を1匹貼り付けて「できた!」と再び持つてくる。もう、諦めて「いいよ。」と完成を認めると、次から次へと「できた!」コールが始まる。

同じ題材でも、毎年、白の空白が目立つようになってきた。子どもはみんな、面倒臭がりになった。道徳的であるが、根気がなくなった。そして、イメージを広げる力も弱くなった。みんないやにわがままだ。のび太やしずかちゃんやジャイアン、そして、スネ夫が生きたドラえもん世界は喪失したのだと思う。

最初の授業だから、教師である私の作品のイメージを押しつけてはなるまい。できるなら、子



「車」

も自身の力でイメージを拡げて欲しいと願ってのことであるが、少なくとも5年前は、画面に一面の花が咲きそろい、空にはチョウチョが飛び交い、真っ赤な太陽も輝いていたのに。

だから、これは失敗の授業になるだろう。成功させるためには、前述のような情景を物語り、イメージを喚起しなければならなかったのだから。

☆

2週目は絵の具との出会いが主眼である。私は市販の絵の具セットは購入しない。絵の具もまた大切な素材であるから、子どもたちに絵の具づくりの楽しさを味わわせたいと思っている。それで、野々目桂三氏が取り組んできた絵の具づくりの方法をまねて、実践している。もう20年来継続したやり方である。

顔料を1kg単位で購入し、1kgの容量の空き缶に入れておく。別にアラビアゴム液(フェキ糊として市販されている)を購入し、洗剤の空き容器に小分けしておく。

理科室にある薬用匙で掬って給食の皿にのせ、アラビアゴム液を入れて筆で混ぜると絵の具のでき上がりだ。至極簡単であるが、顔料の色鮮やかさに魅入られて、子どもたちは楽しく絵の具づくりをしている。勿論、色々な色を混ぜることも楽しんでいる。そして、「先生、こんな色ができた。抹茶色だよ。」と自ら創り出した色の美しさを楽しんでいる。「先生、何か描いてもいい?」と聞きにくる子がいる。「しめた」である。どんな絵を描くのかなと楽しみは私の方に伝染する。そして、思いついたものをすいすい描いている。それはキャラクターだったり、得意にしている動物だったり、

様々である。こんな子はこれからもどんどん主体的に製作してくれるに違いない。

ところがどうだ。子どもはそんな美しいものへ向かうばかりではない。全部の色を混ぜたらどうなるのかといった探求心がわき上がり、ヘドロ状のうんこ色を、それも大量につくってほくそ笑んでいる。「ああ、もったいない」。これが私の本音である。そして、形にもならないドロイングの痕跡を画面に残して、さっさと流しに向かう。それから、そんな仲間と一緒に蛇口をひねって洗いながら色水遊びに興じている。流しは色水の洪水になっている。



「バンザイ」

こんな一時の状況は創造と破壊が同居しているように感じられる。たった20数名の子どもたちを相手にしていても、一人ひとりの感性は違っている。前者のような子どもがよくて、後者の子どもが悪いとは言えない。前者のような振る舞いは、いわば、絵の具との感覚的な、理性的な関係を結んでいるのだと思うし、後者の場合は、絵の具という素材に全身で感情的に挑んでおり、いわば、闘争的であると思うのだ。そして、これまで培ってきた生き方をさえ、発露しているのだろうと思うのだ。

私の掌に子どもを乗せて、私のイメージした主題を与え、子どもが私の思うように動き、そしてタブローのようないわゆる絵を完成させることは容易なことだ。だが、そこでは、大切な自立した主体は育たない。これが、私の結論だ。

(すずいし ひろゆき)

持続可能な造形活動への一歩

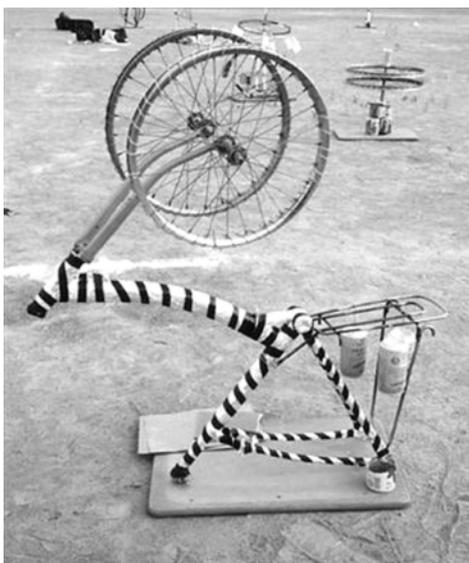
～サステナブル素材の選択を～

東京都羽村市立羽村第三中学校 鈴木 斉

現在、日本の国内には555万台の自動販売機が設置されているという。24時間冷やし、温め、煌々と明かりをつけ、電力を使い続けているらしい。その中の主人公ともいべきペットボトルは、2億5千万年もの長い眠りから覚めた原油から、時間とエネルギーを使って製造され、そのあげく夏の暑い日にはほんの数秒で飲み干されて捨てられることになる。

「スロー・イズ・ビューティフル」の著者辻信一はこのことについて「2億5千万年を数秒で捨てる文化」と語って皮肉り、スローダウンへの意識改革を提唱している。

しばしば、我々はそのペットボトルを素材に、リサイクルアートなどと銘打って造形活動を行ってきたが、はたしてこの素材の生まれ出る過程や源にどれだけの意識を向け、把握してきただろうか。ゴミとなるボトルを再利用したという身勝手な貢献意識を持って、環境問題にかかわる造形活動ができたと自負をしてはいなかっただろうか。



古自転車を使っただけの実践風景

これらのことが環境に関わる美術教育と本当に言えるのだろうか？

古自転車を使った実践から

15年も前になるだろうか。私は「創作の日」という全校をあげた造形行事の取り組みの中で、150台もの廃棄される古自転車を地域や家庭から集め、1班に1台をあてがって、分解し、再度自由に組み合わせ、**「風に動く彫刻を創ろう」**という試みを企てたことがある。その実践はいくつかの美術教育関係の書物にも掲載され、研究会でも大きな反響を呼んだ。「破壊から始まる創作」、「廃棄物の再利用」という発想は、現代美術との関連も匂わせ、エコブームの先取りでもあった。企画、実践ともそれは大いに盛り上がり、生徒の成就感も大きなものであったと記憶している。

しかしこれらの作品は、学校庭園での展示期間を終えた後、春先の大雪につぶされ、破壊にも遭い、ほとんどのものが廃材と化してしまった。校庭の隅に片付けられたそれらは、木の土台、ゴムのタイヤ、さまざまな金属部品、ビニールや皮製のサドル、結びつけた針金、接着剤、装飾に使った空き缶やアルミ材など、分別の難しい多くの素材の塊と化していたのである。再度それらを廃棄物として処理するためには、多くの人手と時間を要することになってしまった。「廃棄物の再利用」が、「廃棄物の再創出」となってしまったわけで、大きな問題を残す結果となったのである。

素材への責任、制作後の責任

その後、私の素材感は大きく方針転換することになる。

それまでは、できる限り多くの種類の素材を提示することが、意欲を喚起し、多様な表現方法の可能性を保障し、生徒個々の個性の創出を促すも



竹林から素材獲得！

のだと信じていた。

様々な金属類、塩化ビニール、木材、プラスチック、発泡スチロール等多くの素材を机の上に並べ、生徒とともに嬉々として、その数の多さに心躍らせていたのである。

しかし、制作後の長いスパンでの作品のその後を考えると、混合素材について疑問を持たざるを得なくなった。その素材が、

- ・どこから生まれ出たものであるのか？
- ・どんな過程を通して目の前にあるのか？
- ・その作品は今後どこへ消えるのか？

それをしっかりと知り、把握し、素材に責任を持つことが大切だと考えたのである。

- ①自分たちの手の届く範囲(地元)から自然素材を探すこと(素材の地産地消)
 - ②生徒に素材獲得の実体験をさせること(素材に対する愛着と責任)
 - ③素材の接続等にむやみに接着剤を使わせないこと(持続可能的制作方法の工夫)
 - ④循環の中にある素材を得ること
- 次第に、これらのことを考慮に入れた題材開発

につとめるようになってきた。

持続可能な素材の獲得を！

2005年は『持続可能な開発のための教育』(ESD: Education for Sustainable Development)の10年の始まりの年である。2002年のヨハネスブルグ環境サミットで提案され、これから10年間世界各国で取り組まれる。学校教育においても、環境教育はすべての教科で取り組むべき内容となっており美術教育も例外ではない。「自由な創作活動」という言葉に胡坐をかいて、環境問題に視点を置かない創作活動であってはならない。素材選びはその第一歩であり、制作方法や作品のその後についても、持続可能的(サステナブル)な考え方が求められている。

- ・木と紙と土の日本文化の再考
- ・植物循環(土に還る)の中での素材探し
- ・石油製品素材との決別

こんなことを、些細ではあるが美術教師として実践していきたいと考えている。

(すずき ひとし)

意欲ある活動のために

浜田市世界子ども美術館館長 寺尾 堂(元中学校教諭)

1. はじめに

学校の授業ばかりでなく多くの学習活動において、成功とか失敗は学習者の意欲によるところが大きい。

子どもに限らず大人においても、熱中し、のめりこんだ活動では、実に多くの知識や技能が身につくと考えられ、特に学校教育においては教師の「意欲に対する工夫」が大事となる。

図画工作科や美術科の研究会では次のようなテーマをよく見かける。

「想像力を伸ばすにはどうするか」、「感性豊かな子どもの育成について」、「造形感覚を養う教育のありかた」等である。

これら「創造力」、「感性」、「造形感覚」の育成や伸張について、突き詰めれば「意欲的な活動を

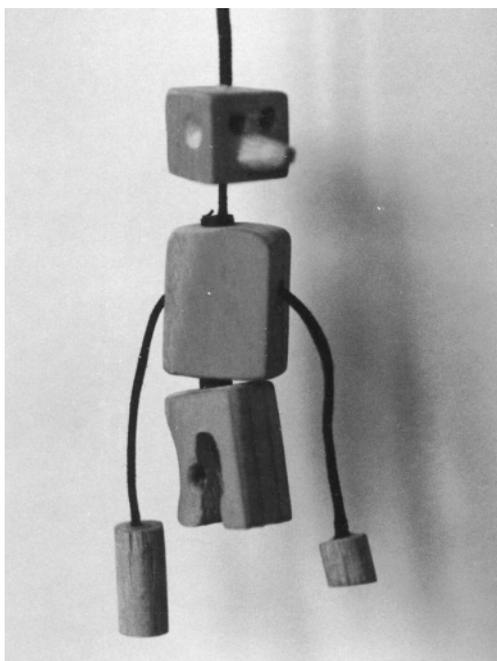


写真1：ペンダントの生徒作品

させるためにはどうするか」というテーマに包括できる。

「創造力」、「感性」、「造形感覚」等の項目は、子どもが1時間中熱中し、活動が時間外に及ぶほどのめりこんだ場合、「創造力」等各々の項目は特別に配慮しなくても自ずと育つのではなかろうか。もちろん「創造力」、「感性」、「造形感覚」等の育成はそんなに簡単なことではなく、それなりの研究実践が必要であり、配慮の大切さを否定はしない。しかし、学習活動を成功させるためになんとしても必要なのは学習者を意欲的にする工夫であろう。

2. 教科教育における意欲化

学習する子どもが活動に熱中し、のめり込むための方策を主に2つの方向から検討してみると、1つは授業の進め方である。すなわち、独創的で興味深い課題の投げかけ、サンプルやその見せ方、授業中の子ども1人ひとりとの対話の工夫等々、授業を進める上での教師自身の活動を検討することである。もう1つの研究課題は、教材、言い換えれば子どもに与える学習課題そのものの検討である。子ども自身の生活や発達年齢、子どもの持つ技術的能力と成就感、子どもにとって完成品の必要度、また子どもの考えが自由に表現できる内容や構成等、子どもの活動意欲に関わる教材条件を検討することが必要となる。

3. 教材例と意欲について

ここでは中学校の生徒に提供した2つの教材について振り返り、学習意欲の様子を述べることにする。

① プルススイッチのペンダント(写真1・図1)

和室などで使用される電灯は紐を引っ張るタイ

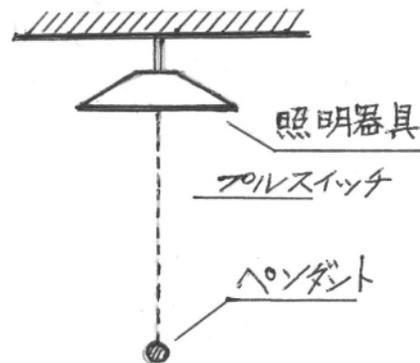


図1：ペンダントの位置について

プのスイッチが多い。しかし、紐の先に付いている小さなペンダントはみんな同じ形で個性がない。このペンダントをつくることとした。

結論から言うと、極めて集中した取り組みが見られ、それは私の予想以上であった。

意欲的に取り組んだ理由として考えられることは2つある。1つは作品の大きさが関係した様子であった。かなり小さな形のため時間的に早く完成したからではないかと思われる。もう1つは現実に使用でき、且つ、課題が意表をつくものであったからであろう。

② 水害を鉛筆で描く(写真2・写真3)

低年齢である園児や児童の表現は驚きなど心の動きの表現であるが、中学生あたりになると構成美を意識するようになり画面のまとまりや形、色、技術的に上手な表現を求めようとする。しかし、感性教育の面から心情表現は極めて大切であり美

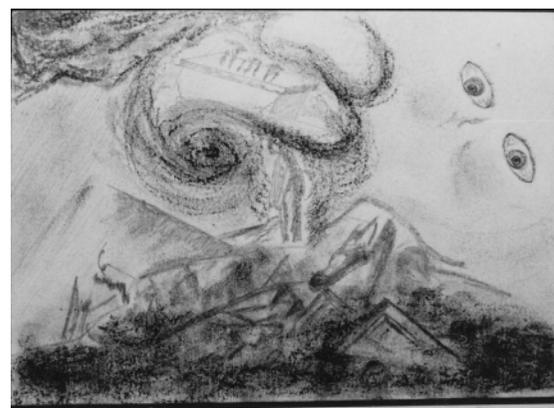


写真2：生徒作品より

術教育の中でも思いを表現することを大切にしたいものである。

昭和57年7月22日から23日にかけての豪雨で島根県西部は大変な水害に見舞われ、住民は濁流の中で生死に直面した。生徒たちはこの大変な体験を通して恐怖感だけでなく復旧作業中で見た様々な人間関係を感じとっている様子であった。

9月に入り水害をイメージ画に起こすこととした。その結果、生徒たちは描写活動をよく頑張り作品の完成度は高かったのであるが、内容的には期待したほどの深まりがなく、作品は情景描写とシュール的な恐怖感の表現にとどまり、何かを強く訴えようとする意欲にはやや欠けていた。



写真3：教師のサンプル作品

サンプルにした教師の作品が恐怖感の表現であったことが失敗であった。また、あまりにも心の動揺が大きかった水害で、ただ課題を投げかけただけでは恐怖感のみが表面化するのとは当然であり、描写活動に入る前にいろいろな思いを心に呼び戻し定着させる作業をしなかったのも失敗の原因と考えられる。

4. おわりに

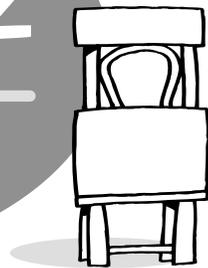
23年間美術の授業であまり失敗を感じなかったのは、担任した生徒たちのほとんどが作品の制作を楽しんでいたからだと思っている。いま、浜田市世界子ども美術館に来る多くの子どもたちも創作活動に楽しく取り組んでくれる。子どもが楽しく頑張れば我々の企画は大成功に思え、明日につながっていく感がある。

(てらお たかし)

子どもの椅子

FROM

長崎県川棚町立川棚中学校
平野 和則



中学校では、総合学習の枠組みの中で教科の特性を生かしながら横断的な学習を取り入れることにより、学習の底辺を広げる試みがなされている。教科の中でも、とりわけ美術においては様々な領域の中に総合学習としての関連を得やすいものが多い。本校に勤務して3年になるが、当地は長崎県の大村湾に面

した風光明媚な場所にあり、素晴らしい環境に恵まれている。赴任1年目、1年生の総合学習のテーマは「地域とのふれあいを通して学ぶ」であった。そこで、美術科として「アートDE川棚」というコースを立ち上げ、11月の総合学習発表会までの期限付きということで、題材を2つに絞り込んで取り組んだ。

1つは本校の総合学習の代名詞でもある“虚空蔵(こくんぞ)”山を描く題材。普段は立ち入り禁止になっている学校の屋上の一等席から描いたスケッチを元に、ボードに様々な描材を用いて描画してもらった。仕上げのフレームにはアートグラスをスクラッチして装飾的な表現を試みた。

2つ目は地域の自然や環境素材を生かした「ボックスアートをつくる」。海岸に流れ着いた自然物や人工物の廃材、学校の裏山に登って集めた木の実や藁などを素材に、ボックスの空間に自分のイメージを創造するというものであった。制作後の生徒の声を2編紹介する。

「こくんぞを描くとき先輩たちも上ったことがない学校の屋上でのスケッチ、とても感激しました。そこから見るこくんぞ山はとても迫力があり、雄大でした。墨で描くのは思ったより難しかったです。ボードに描くことを忘れ、調子に乗って描いてたらにじんだりして…。昔の人は墨だけであんな風に描けてすごいなと実感しました。」

「私はボックスアートにすごく時間を使いました。素材は手当たり次第に集めただけ、どういイメージにするかが一番大変でした。次に大変だったのは、材料の接着。なかなか着かなくて重しで押さえたりしました。テーマを海にしたので背景を青

色にし、木枠には緑色で海草をイメージしたものを描きました。ボックスの空間に自分のイメージが表現できるなんて結構楽しいなと思いました。」

「アート DE川棚」コースを選択した生徒は、1年生175名の内24名と少数である。殊に男子11名の内、第一希望の生徒は半分であった。当然基本的な描写力や構成力に差があったが、テーマのオリジナルな表現の重要性、与えられた素材を工夫する創作性を引き出すことで、生き生きとした表現活動が成されたと思う。また、学習発表会においては作品展示に合わせて、プレゼンテーションにより制作過程や生徒一人ひとりの作品紹介、



材料をレイアウトする
解説等を発表し、コース学習で学んだ充実感を得ることができたと思う。

尚、この学年は現在3年生で、メンバーは異なるが「アートDE平和」というコースを設定し、平和のメッセージボードとモニュメントづくりにチャレンジした。巣立っていく生徒たちの心の隅に、アートとふれあう学習を通して得た何かがあれば幸いである。(ひらの かずのり)

図工室

美術室

小学校の図画工作クラブ活動を担当していて、いろいろ思うところがある。

まず、週1時間で45分しかない。年間の活動時間が少ない。

図画工作が大好きな子どももいるが第3希望で入ったのでそれほど積極的でない子どももいる。

そんな中で、「図画工作クラブが楽しくて待ち遠しい。」と思える活動をしたいと考え、いろいろなことに取り組んでいる。

子どもと相談しながら計画を立てるが、子どもの思いだけで進めていくと、「マンガ」や「イラスト」、「風景画」や「紙工作」など、限りある内容しか出にくく、力を出し切った充実感や満足感を味わえるものが少ないように思われる。

図画工作クラブの活動

佐々木 ひろみ(大阪府大阪市立中本小学校)

そこで、子どもたちの意見も取り入れながら、日常の図画工作の学習ではあまり実施しないような活動を行っていった。

- ・墨を使って和紙に絵を描きマーブリングする。
- ・もみがらを燃料にしてドラム缶窯での焼きものづくり
- ・板を電動のこぎりでアットラダムに切り、組み合わせて立体にする。
- ・板にくぎをいっぱい打ちつけて、カラーの輪ゴムをかける。
- ・透明のCDケースにマンガや名画を写し、アクリル絵の具

で着色する。
・マンガやイラストを絵札として描き、読み札も考え、「漫画かるた」に仕上げる。

・学校の外へ出て、「アートなもの」を見つけてデジカメに撮り、発表し合う、などなど。そんな活動を続けているうち、チャイムが鳴る前からもう活動を始めている子が出てきた。「先生、もう終わりの時間になった。」と残念そうな子も。

思い切り表現活動を楽しむ子どもたちを見るとうれしくなる。(ささき ひろみ)

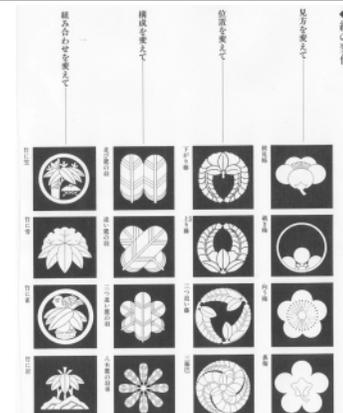
伝統文化を授業に生かす

石野 道子(埼玉県鶴ヶ島市立鶴ヶ島中学校)

日本には、古来から引き継ぎ発展してきた伝統文化が数多くあります。私は、授業の中でデザイン学習をする時に、この伝統文化に触れさせ生徒に肌で感じさせるようにしています。その中の一つに「紋」を活用しています。

紋は家の印として儀礼的な装飾に用いるものです。その起源は古く、平安時代の中期頃、器、動植物、天文、地文、文字などの形をとって調度品、武具、衣服などに付けて持ち主を明らかにしたことから始まっています。

また、紋は単に家を表す記号という以上にデザイン的に非常に優れており完成された美しさを持っています。小さな紋がついていることで装いの格が上がり、また会話のきっかけにもなって社交の楽しさも広がります。諸外国にも紋章はありますが、衣服に紋をつけるのは日本独自の風習で、海外で紋付の着物を着ていると、紋のシンプルな美しさに感嘆されることが多いものです。着物の紋は大切にしたい日本の心であり誇りといえます。



世界文化社「きもの冠婚葬祭」より
紋のデザインの原型は動植物等からなっており、極めて扱い易い題材です。上記の図のように紋も次々と変化してきました。その変化の仕方は分かりやすく理にかなっています。このように日本にしかないものを大切に、知ることによって自分のものにする学習、そんな授業づくりをしています。(いしの みちこ)

新校舎を彩るステンドグラス

～過去と未来が息づく表現活動を求めて～

富山県砺波市立出町小学校 中居 利幸

1. はじめに

平成14年4月、新しい土地に竣工となった新校舎に全校360名余りの児童が入校した。子どもたちはもちろんのこと、地域住民もこぞって喜び、祝賀会や記念の行事などが精力的に行われていった。しかしである。子どもたちは、入校から日を追うごとに、複雑な思いをふくらませていたのである。以下は、2学期間もない、ある日の子どもたちの話し合い(5年生)である。

- ・私、最近、何か前の学校のこと、思い出すのね。ほら、“にぼぼ広場”の池にいたトノサマガエルとか、「キャーッ」て言ってつかまえたじゃない。おもしろかったなって。
- ・ほくも、“太陽の広場”にあったでっかい木に登って先生に怒られたことを、時々思い出さなければ、何か、楽しかったなって。
- ・じゃ、今の学校は楽しくないってこと？
- ・そんなことはないよ。でも、…。
- ・もうもどれないんだよ。

子どもたちは、新しい校舎へ移った現実はわかるけれども、旧校舎に対する愛着が増し、不安定な気持ちになっていることが、教師である私にずっしりと伝わってきた。

そこで、取り組んだのが、次に紹介する造形活動である。

2. 題材について

旧校舎における思い出と新しい校舎への期待や夢をともにステンドグラスに表して飾ることは、子どもたちに、校舎は姿を変えたけれども出町小学校の歴史が終わったわけではないことを感じさせることにつながる。

さらに、透過性による色鮮やかな表現は、子どもたちの本校を愛する心を強めるとともに、心の

区切りをつけさせ、新たな歩みを生み出していく原動力となる。

3. 全体計画

- 第1次 校舎内を巡り、ステンドグラスを飾る場所を決める。(1時間)
- 第2次 表したい絵柄と願いについて全体で話し合い、飾る数だけ決める。(1時間)
- 第3次 グループに分かれて型紙に下絵を描き、配色を決める。(2時間)
- 第4次 ステンドグラスに縁取り線を描き、色を工夫しながら入れる。(5時間)
- 第5次 作品を飾り、そのよさや自分の思いを語り合う。(1時間)

4. 取り組みの実際

絶対に忘れたくない思い出を!? (第2次)

どんな絵柄をステンドグラスにするか、熱気につつまれて話し合いが始まった。遊び、授業場面、“太陽の広場”の大きな木とそれに登っている自分の姿、“にぼぼ広場”に咲くきれいな花など、子どもたちは、自分が描きたい絵柄について次から次へと言葉を発していった。

その時である。ある児童が「お客さんが、ぼくたちの学校を見に来ると思うのね。そしたら、前の校舎の絵ばかりだったら変に思うんじゃないかな。」と言い放ったのである。

教師は、この場面を子どもたちの新たな歩み出しを図るよい機会ととらえ、旧校舎の思い出をステンドグラスにしたいと強く主張していた児童に、「君がお客さんだったら、どんなステンドグラスを見たい?」と投げかけた。

多くの子どもたちが視線を下に向け、考え始めた。子どもたちの沈黙の時間が、流れていった。

この時、教師は何か言葉を切り出せばよいのか、一瞬迷ったが、努めて笑顔をつくり、子どもたちの動き出しを待った。そして、ついに一人が沈黙の中、ポツリと次のようにつぶやき、話し合いが動き出した。

- ・ぼくたちの学校って、砺波の代表の建物だったよね。
- ・だから、何を言いたい。(教師)
- ・ほくね、やっぱり、ちょっと、ステンドグラス変えた方がいいと思う。
- ・へー、どうしてそう思ったの。(教師)
- ・だって、お客さんに悪いような気がだんだんしてきた。
- ・どういうこと？
- ・ぼくたちはいいけど、お客さんが見たいのは何かちがうのかなと思う。

このようなやりとりの後、次のような絵柄(題名)が最終的に決まった。

- 旧校舎の思い出
- 砺波の四季
- おどる魚たちⅠ(清流庄川にすむ魚の姿)
- おどる魚たちⅡ(清流庄川にすむ魚の姿)

「これなら、新しい校舎をつくってくれた人も喜んでくれるんじゃないかな。」学校は、みんなのもの。工事をしてくれた人たち、地域の人たち、先輩たちのもの。自分たちの願いだけで新校舎がつくれたのではないことに気づいた子どもたちである。



「旧校舎の思い出」より

こんなにきれいだなって、すごい! (課外)

どんな色合いにするか、花や魚の細部まで意見を交わしながらつくりあげ、飾ったステンドグラスであったが、いつの間にか日が過ぎ、冬を迎えた。そんな晴れ渡ったある日。積もった雪の上にステンドグラスに入れた色が、なんとも言えない美しさで映ったのである。いち早くその光景を目にした子どもがすぐに学年の仲間に知らせ、私にも知らせにきた。大急ぎで駆けつけた子どもたち、そして私。誰も声が出ない。やっとな、誰かがつぶやいた。

「こんなにきれいだなって。すごい。」



「砺波の四季」より冬の風景

5. おわりに

子どもたちの旧校舎に寄せる温かい思いをステンドグラスの色と形で表現させ、その喜びを味わわせるとともに、自分の学校を愛する心を強めようと取り組んだ実践。教師が予想した以上に、子どもたちは題材に正面から向き合い、取り組んだ。今後も、子どもたちの成長を促す題材とは、どんなものなのか、考えながら実践していきたい。

話は変わるが、今回取り組んだステンドグラスづくりは、つくっているときだけでなく、完成した後も表現した喜びが継続する、子どもにとって作りがいのある、よい題材であったように思われる。子どもの生活に根ざした実践、このことも、今後、題材を設定していく上で大切にしていきたいと強く思った。(なかい としゆき)

3学年「ブラケットライト」

～光をデザインする～

北海道札幌市立あいの里東中学校 向井 正樹

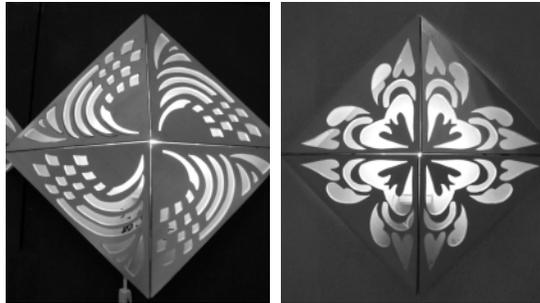
1. はじめに

美術では造形活動に取り組むことで感性や発想構想の力を高めたり、創造的に表現したり、ものをつくる力を養うことを目的としています。私は美術の学習が閉じられた活動ではなく、日常生活と直接的につながっていることを特に大切に指導しています。

実際、私たちの衣食住の全ては、誰かが生産したものに支えられ、そして、それらは生産者の工夫や個性から生じています。

新しい題材を構想するときには、まず、ものづくりの有用感、芸術性、プロセスと基礎的な技能などの題材観を明確にしなければなりません。授業を「樹」に例えれば「根」にあたるのが題材観だと考えています。

本題材は壁に設置する照明、ブラケットライトです。鈍角二等辺三角形4枚をピラミッドのように組み合わせてつくります。



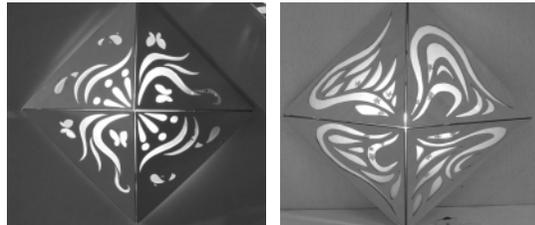
ブラケットライト作品例

2. 温かな光をデザインする

生活の中における「あかり」の効果や照明器具の機能について考えることも大切な学習だと思います。「あかり」は色だけではなく、形や高さも私たちの心に少なからず影響しています。天井に設置するシーリングライトは活動を照らし、この題材のブラケットライトは比較的低い位置で、壁面

から拡がる光が、安らぎの空間を演出します。

題材設定では自然素材の温かな味わいを生かすようにしています。本題材でもシェイド部分の材料に電球のオレンジと優しく調和するように、しなベニヤを使用しました。また、切り抜いた穴に和紙を貼り、間接的な柔らかな光を工夫した作品も見られました。つくりながら考える、考えながらつくる。やり直しや変更ができる活動が発想や構想を拡げていたように感じました。



和紙の貼り方によっても違う感じが出る。

3. 技術科との合科

シェイド部分(切り抜きの形)のデザインと切り抜き・やすり仕上げを美術科で、電球・ソケット等の組み立て、塗装を技術科で取り組みました。この題材では三角形を組み合わせる基本的な形は共通していますので、発想力を高めるのは光を通す穴の大きさ、形、ならべ方のデザインの工程に絞られます。ここが最も重視すべき段階だと思います。折った紙を切って、形を探したり、同じ形の組み合わせやシンメトリーではない自由な抽象形や具象的な形を追求する生徒も現れ、多様な図案が生まれました。

後半の工程を技術科に指導してもらうことで発想構想の指導に集中することができました。つまり、時間と費用を両教科で分担できるだけでなく、3年生として十分な満足感を得るに足る質のよい作品をつくることができたのです。

糸鋸による切り抜きを経て、あかりを入れた時の生徒の感動はその嬉しそうな顔から見取ること

ができます。本校では過去4年間、3学年での照明器具づくりを続けているので、1・2年生のうちから楽しみにしている生徒も多いようです。



技術科での授業の様子

①材料

美術科～シェイド：しなベニヤ(4mm)の二等辺三角形(230/300/230)4枚

底 板：AGボード(4mm)・正方形(300×300)・紙ばんそうこう、布ガムテープ(板接合用)

技術科～ソケット・電球・コード

②手順

- 1) 題材導入「あかりと生活」……………1時間
- 2) 図柄アイデアスケッチ……………1時間
- 3) 切り抜き・やすりがけ……………2時間
- 4) ソケット等組み立て、塗装 2時間(技術)

4. おわりに

光のデザインは美術と生活の関係について学習するには有効な教材だと思います。本題材の4枚の組み合わせは3枚でも組み立てが可能ですし、照明器具のデザインは多様な展開が期待されます。また、ライティングデザインの視点から、光のあて方、明るさ、色の構成など他の造形との組み合わせも考えられます。写真のように、ディスプレイの仕方によっても様々な効果が生まれます。

また、光を学習の切り口の一つとして捉えれば、絵画や写真の鑑賞の授業や建築と光の関係について考察する授業、さらには学校祭など行事への展開も考えられます。

(むかい ただき)



校内での展示風景



札幌市・中学校美術展での展示(柱に)



札幌市・中学校美術展での展示風景(壁に)

「カボチャドキヤへおいでなさい」

カボチャドキヤ美術館館長 トーナス・カボチャラダムス

賢明なる読者諸兄！

吾輩が、かの無名なる「カボチャドキヤ国立美術館」バカ館長、トーナス・カボチャラダムスである。

吾輩は、「造形ジャーナル」編集部のご依頼によって、皆様を「カボチャドキヤ国立美術館」のご案内申し上げなければならぬのである。

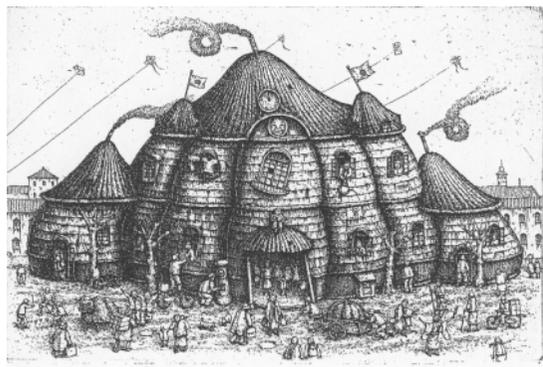
しかしながら読者諸兄！皆様を「カボチャドキヤ国立美術館」に御案内申し上げるには、まず皆様を、「カボチャドキヤ民主々義人民共和国」のご案内申し上げなければならぬのである。

「カボチャドキヤ民主々義人民共和国」は、何処に存って、如何なる国情を有するのか？

賢明なる読者諸兄のなかには、「民主々義人民共和国」に注目されて、「さては例のアノ国の、世を詐る別名に相違あるまい。」と喝破される向きもあられようが、「カボチャドキヤ民主々義人民共和国」は「カボチャドキヤ民主々義人民共和国」であって、他のいかなる国家とも異なるのである。

それでは、「カボチャドキヤ民主主義人民共和国」は、何処に在って、如何なる国かと言えば、実は吾輩にもよくわからぬのである。

こういう怪しげな問題は、頭脳明晰博覧強記において並ぶ者のいない故種村季弘先生にお尋ねするのが最善であろう。



「門司港駅」

先生は昨夏惜しまれつつ世界された。

冥界に電話すると、先生は、このカボチャドキヤから遠からぬ別府温泉で、地獄巡り観光開発公社総裁をされているということではないか！

温泉好きの先生は、自ら地獄行きを志願されたのである。

「先生お元気ですか？ ごぶさた致しております。先生は生前、『カボチャドキヤ国見聞録』を執筆されていますが、カボチャドキヤが何処にあって、どんな国か、簡単に説明していただけませんか？」

「ゴロニヤーン。やっぱり温泉はいいにゃあ。君も早くこちらに来にゃさいよ。」

「えっ、なんだか発音がネコ的になりましたね、先生。」

「そんじやことはにゃいだらう。こちらじゃみにゃこんじや風だよ。金は要らんし、温泉は入り放題。地獄は極楽だよ。君も来にゃさい。」

「はい。いずれ参りますがカボチャドキヤは？」

「ムニヤームニヤ、たしかアレはだにゃあ、とにかく門司港駅から出発して、大陸を渡ったのかにゃ、半島だったかにゃ、太白山脈を越えてゴビの砂漠あたりだったかにゃ、うんにゃ、インドシナ半島だったかにゃあ。とにかく、カボチャラダムス殿下が魔法をかけなくっちゃにゃあ。」

カボチャラダムス殿下？ 魔法？ なんのこっちゃ？

頭脳明晰博覧強記を誇った種村先生も、仕事をせずに温泉三昧、ようやく呆けてこれたのか？

かくなるうへは、先生御自身に来ていただいて、案内していただくより他にない。門司港駅から出発することは確かなのだから。

（『空想観光カボチャドキヤ』石風社刊参照）

※種村季弘(1933~2004)
エッセイスト・ドイツ文学者

造形ピックアップ

うしく現代美術展「小・中学校鑑賞会」

「うしく現代美術展」実行委員 後藤 雅宣 (千葉大学教育学部)



茨城県の南部に牛久という町がある。この人口8万程度の、美術館もない地方都市に、「うしく現代美術展」と称する美術展が毎年催される。この展覧会は、県南地域より選抜(入選)された約60名の作家と、牛久市民と行政との連携による手作りの美術展である。

この展覧会の特徴は、作家と市民と行政との協力体制によって実現されている点や、諸造形の概念や様式を超越している点にある。伝統的な様式もあれば、現代的な表現もある。絵画や彫刻といった領域区分はなく、書やデザインや映像の分野までもが包含されている。多様な芸術観は認め合うものの、表現としてのクオリティには厳しい選別の目が注がれる。

地域発信型の造形展であると同時に、地域文化創造型の意味合いを高めながら、10年という長きに渡って実施され続けてきた。美術館のような専門施設やスタッフをもたないこの展覧会は、その実施場所や企画理念までもが、作家と市民と行政からなる実行委員会によってリードされる。作品展示のほか、シンポジウムや音楽界との連携企画、ワークショップ等を開催してきた。今回のワークショップでは日比野克彦氏にご協力をいただいた。

また5年前より、学習指導要領の改訂期にあわせて教育普及活動も行ってきた。「小・中学校鑑賞会」と名づけられたこの企画には、小・中学校単位で児童・生徒が訪れる。出品作家はそれらの日程に合わせて集い、大交流会が行われる。今回の参加児童・生徒数は、700名を超えた。また、出席



ポスター作品の前で児童と語りう

作家ものべ100名近くにのぼった。鑑賞(交流)の機会を教育的にどのように位置づけるかは、各学校の判断に委ねられる。そのため、市の教育研究会での全体説明のほか、事前に各校教員と実行委員とのミーティングも行われる。

会場では、作品の前に立つ作家と、児童・生徒との自由な語らいの場が実現される。率直な感想や疑問や批判の一つひとつに、作家が丁寧に対応していく。そこには「鑑賞」というより、まさに人と人との交流という風景がある。

作家には作家としての芸術的フィールドがある、児童・生徒にはそれぞれの造形の世界がある。それらは同質ではないが、ただ一点分母を共有する点がある。それは、ものを創造する瞬間の無垢な人間の姿である。何かを創造することに嬉々として没頭している姿は、作家であれ、児童・生徒であれ同質といえる。「鑑賞」の理想形とは、作品を媒体として、この点で作家と鑑賞者が同じ目の高さで心を通わせることなのかもしれない。毎年、この企画を観察してつくづく実感させられている。

地域社会と学校教育の連携が問われる今日、また、文化芸術振興基本法が施行され地域の芸術文化と学校教育の連関が問われる今日、この展覧会のこの企画が、地域力と学校教育力の結集による造形教育の一つのスタイルとして定着しつつあることを感じている。(ごとう まさのぶ)



屋外の立体作品を囲んで